

授業評価アンケートのまとめ

－平成16年度から平成25年度まで－

日大生産工 ○山川 一三男

1 まえがき

FD(Faculty Development)推進の一つとして、本学部では「学生による授業評価」の実施について試行し、検討・実施してきた。平成16年度からは、新たに発足した教育開発センター委員会のFD推進委員会が、授業評価における検討を引き継いだ。平成25年度には教育開発センターが発足し、FD推進委員会はFD専門委員会と改名した。

教育の充実を図るには、教員の授業に対する最も有力な批判者としての学生から、教育改善に役立つ意見を吸い上げることはきわめて重要であり、それを効果的に授業改善にフィードバックすることが必要不可欠である。また、授業アンケートは、継続的な教育改善・教育サービスの一環として重要なものと位置づけられ、学生の批判・要求を知り、授業および教育環境を可能な限り改善し、教育の質の飛躍的な向上をはかるための有益な資料を得るために実施するものでもある。今回、平成16年度から平成25年度までの授業評価アンケート結果をまとめたので報告する。

2 実施方法

アンケート実施科目は19年度から、一部の科目（生産実習、卒業研究、スポーツ科目）を除きすべての科目とした。アンケートを実施するマークシートは一種類とした。回答はマークシート方式として、アンケート質問項目につけて回答欄を設けた。アンケートは無記名式とした。17年度からは学科、学年を新たに回答する欄を設けた。21年度より2学科が新設されたため、学科記載部分の増加により、追加設問部分が1問減少し、2問となった。

マークシート用紙の配布・回収は授業担当者に依頼した。マークシートは、事前に各学科・系の授業科目ごとに受講者人数分のマークシートを封入して送付した。授業担当者には授業の中の適切な時間を選んで実施してもらった。

アンケート調査の実施期間は前期および後期とも授業終了3週間を目安に実施をお願いした。アンケートを実施した授業担当者はアンケート回答用紙を各学科・系事務室に提出するようお願いした。

提出の際、①授業科目名（どの学科・系の授業として実施したか）②担当教員名、③実施曜日・時限、④アンケート回答枚数、以上の4項目を書いていただいた。

アンケートはすべて業者委託にて各教員・授業科目ごとに封筒に封入したマークシートを各学科・系に配布した。また、回収したアンケートを業者に送付し、集計をお願いした。

3 アンケートの分析結果

1. 回収結果

配布クラス数に対する実施クラスの割合は、25年度では前期、後期とも95%以上を示し、ほぼ全科目でアンケートを実施しているといえる。

これまでは、配布クラス受講者数に対する回答者数で比較していたが、22年度より実施クラスの受講者数に対する回答者数の割合（回答率）として算出することとした。25年度の回答率は前期で80%、後期で77%であり、これまでで最高の値を示した。例年通り後期になると回答率が減少しているが、その差は昨年より広がってしまった。

学生数はここ数年減少傾向にあり、そのため受講者数もやや減少している。後期の受講者数は例年通り減少している。このような結果になったのは、新入生の数にそれほど変化がないことから、4年生での留年生が減少したためと思われる。配布クラス数は前期と後期で差が生じてきている。昨年まではほとんど同じであり、学科増設、既存学科の定員数の削減などの影響がなくなり、全科でセメスター制がきちんと整ったためと思われたが、新カリキュラムの始動

Summary of the Class Evaluation

－ from 2004 to 2013 －

Isao YAMAKAWA

により、1年生科目のアンバランスが影響していると思われる。

23年度、24年度25年度の3年間の総合的な数は、前期が1051クラス、受講者数約65700名、後期が1040クラス、約57800名ぐらいであり、1クラスの人数は平均約60名である。また、25年度は学生1人あたり、前期は9.7科目（24年度9.7科目）、後期は8.4科目（24年度8.6科目）受講しているといえる。学生数は4年生を含んでいるので、1年生から3年生まで、ほとんどの学生が履修単位数の上限24単位までめいっぱい履修していることが伺える。

回答率は前期、後期とも平成25年度が最も高い回答率を示した。前期に比べ後期の回答率が減少する傾向は変わらず続いている。学科によっては回答率が80%を超える学科もあり、現在の調査方法が浸透しているためと思われる。回答率における学科の傾向は、この3年間ではほとんど変わらず、前期・後期ともJABEEを実施している学科が比較的高い値を示しているといえる。

2 設問項目の総合的分析

教員の教育方法に関する設問1)～設問8)では、25年度まではこれまで以上に全体的に右上がりの傾向が顕著に見られる。これまで同様①教員は授業詳細通りに熱意を持って授業をしていること、②学生は真面目に出席しているが、授業時間以外に勉強しないため理解度はそれほどではないこと、といえる。

教員の話し方や、黒板・機器の利用、学生の参加などすべて増加傾向が見られる。教員が授業改善に努力していることを伺わせる。

設問9)では後期が低い結果が得られた。 Semester制を採用し、科目内容にかなり差異がある前期と後期の間に明確な差異が生じ始めたためであろう。

大きな変化が見られたのが設問10)である。ほとんどしない学生が大幅に減少し、自宅学習した学生がかなり増加した。22年度後期に「この科目の予習・復習・課題・レポート作成などに週平均で何時間費やしましたか？」と文言を変更した結果、自宅学習した学生が増加した。また、23年度からは15週と準備学習の徹底がシラバスに記載されるようになったので、授業以外での学習時間の確保に変化が見られたのではないと思われる。

3 授業分野別の比較

全アンケート実施科目について、講義科目、演習科目、実験科目に分け集計を行った。他の分析同様、アンケート回答数が10人以上のク

ラスについて行った。設問1)～8)においてはそれほど目立った差異は見られなかったが、これらの設問では演習科目が比較的高い値を示した。しかし、設問9)出席状況と設問10)授業時間外での自宅時間においては、実験科目が他の分野より非常に高い結果となった。これは毎年同じような傾向である。特に自宅学習においては、実験科目は講義科目や演習科目より1ポイントも高いことから、自宅では、学生は実験・実技科目にかなりな時間を費やしている事が伺える。演習科目にはあまり時間を費やしていない結果となったことが気がかりである。

4 出席回数別の比較

教員へのアンケートの記述の中に、「出席回数の少ない学生に評価されるのはどうなのか」、「出席回数別に評価できないか」との意見が寄せられていた。今回、平成24年度の全科目のデータをもとに、設問9)出席回数の記載ごとに各設問の平均点を求めた。アンケートに回答した学生は前・後期とも9割近くの学生が欠席は1回までである。学年が上がるごとに欠席回数は増えている。4年生は前・後期とも全出席+欠席1回が64%程度しかなく、欠席が多いことがわかる。就職活動の影響と見られる。全出席と2～4回欠席の比較では、前・後期とも設問1)～設問8)ではほとんど差異はないことがわかる。設問10)では差異が見られ、欠席が多くなると自宅学習時間が減少しているといえる。欠席5回以上の学生の評価は、前・後期ともすべての設問でかなり低い記述をしていることがわかる。これらの学生に評価されることが教員には耐え難いのではないと思われる。4年生の欠席が多いが、学科によっては4年生の自宅学習が高い学科もあることから、一概に4年生の評価が低いとは言えない。

前述したように1クラスの平均人数は60名ぐらいなので、その中に欠席5回以上の学生は0.5名しかいないので、これらの学生の評価が、アンケート全体の評価には影響していないといえる。

4 まとめ

「学生による授業評価アンケート」の結果をまとめることにより、今後の改善に向けての方策が、若干なりとも明らかになった。設問項目でのポイントの高い授業方法をどのような方法で他の教員に紹介するかが重要なポイントである。この点を全教員に浸透できれば学部学生の講義への理解度は増してくれると期待できる。